

ヒラシロ遺跡

～発掘調査と保存整備事業のあらまし～

浜松市教育委員会

2016年3月



例　　言

1 本書は静岡県浜松市天竜区熊 665-2 におけるヒラシロ遺跡の発掘調査および保存整備事業の概要を掲載した報告書である。

2 現地発掘調査及び保存整備事業は、天竜市教育委員会（当時）が静岡県教育委員会の指導の下で実施した。整理作業は天竜市と浜松市の合併後に浜松市教育委員会が実施した。

3 発掘調査および保存整備事業にかかる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積 77 m²

調査期間 現地調査 平成 4 (1992) 年 1 月 24 日～2 月 6 日

整理作業 平成 27 (2015) 年 4 月～平成 28 (2016) 年 3 月

保存整備事業期間 平成 4 (1992) 年 7 月～平成 6 (1994) 年 3 月

4 調査体制は以下の通りである（所属は当時のもの）。

現地調査 調査主体 天竜市教育委員会

調査員 野沢豊秀（天竜市総務部総務課）

整理作業 調査主体 浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課が補助執行）

担当者 鈴木京太郎、熊谷洋子（以上浜松市民部文化財課）

5 本書の執筆・編集は、鈴木京太郎が担当し、熊谷洋子が補佐した。

6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市民部文化財課及び浜松市天竜区まちづくり推進課が保管している。

7 現地調査、整理作業および本書の編集にあたり、向坂鋼二氏からご指導を賜った。記して深謝したい。

凡　　例

1 図中における方位は磁北、標高は海拔である。

2 遺物の実測図版における番号と、写真図版における番号は同一である。

目　　次

第 1 章 序論	1
第 2 章 発掘調査の成果	4
第 3 章 保存整備事業の概要	12
第 4 章 総括	16
写真図版	17

第1章 序論

1 調査・整備に至る経緯と経過

発掘調査の経緯と経過 1992年1月、天竜市（当時）熊で行われていた中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う圃場整備工事中に縄文土器等が出土した。天竜市教育委員会（当時）が調査を実施したところ遺構・遺物が確認されたため、周辺の通称地名を基に埋蔵文化財包蔵地「ヒラシロ遺跡」として新規登録された。

現地調査は1992年1月24日から2月6日に行われた。写真撮影は、35mm判フィルム（カラー・ネガ・モノクロ・リバーサル）を用いて行われた。測量作業は、水糸を50cmメッシュに設定して行われた。以下、発掘調査の経過を記す。

- 1月 24日 工事中に遺物が出土したため、一旦工事を中断する。
- 1月 27日 現地踏査によって、さらに縄文土器が採集される。
- 1月 28日 発掘調査が開始される。表土・包含層掘削を行う。
- 1月 29日 遺構精査・遺構埋土掘削を行う。
- 1月 31日 測量作業を開始。
- 2月 3日 向坂鋼二氏による現地指導を受ける。
- 2月 4日 調査の状況が新聞報道される。
- 2月 6日 調査最終日。写真撮影後、発掘現場の養生を行う。
- 3月 15日 現地説明会が開催される。

保存整備に至る経緯と経過 発掘調査中から新聞報道がなされ、現地説明会にも多数の市民が訪れるなど、ヒラシロ遺跡は大きな注目を集めた。そうした中、遺跡の保存に関する協議が行われ、圃場整備工事を一部中止して市が土地を買収し、遺跡を保存することとなった。1992年3月には、天竜市教育委員会によって市指定史跡に指定された。保存整備事業は、1992年7月から1994年3月（平成4～5年度）に実施された。1994年4月には史跡公園として開園し、4月24日には一般公開を記念して見学会や講演会が開催された。

整理作業に至る経緯と経過 本遺跡の出土遺物や諸記録が長年未整理であったため、合併により業務を引き継いだ浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）により、2015年から2016年にかけて断続的に整理作業が行われた。

整理作業では、台帳作成・注記・分類・接合作業を行った後、実測・トレース・写真撮影を行った。調査や整備に関する図面・写真等の記録については、収集・整理を行った後に、必要に応じて図面の再構成や再トレースを実施した。



遺跡発見時の現地



現地での発掘作業



現地説明会

Fig.1 発掘調査時の状況

2 遺跡周辺の環境

地理的環境 浜松市は静岡県西部に位置し、北を長野県、西を愛知県と接する。本遺跡が存在する市北部は北遠地域と呼ばれ、山地の間を縫うように天竜川が南流している。遺跡周辺の地形は急峻であるが、遺跡自体は傾斜が緩やかな山腹に立地している。遺跡の標高は約 540 m である。遺跡の南側に横山川、西側に阿多古川が流れ、いずれも天竜川へ合流している。遺跡の立地する土地はかつて棚田であったが、遺跡発見の契機にもなった圃場整備によって茶畠へと転換されている。

歴史的環境 本遺跡周辺では単発的に磨製石斧などの石器が採集されているが、遺跡の存在は明確ではない。本遺跡より南方の阿多古川流域等、天竜川とその支流が形成する河岸段丘や平野には遺跡が分布する。縄文時代は、早期に森脇遺跡・上野遺跡等で採集品が知られる程度で、中期～晩期に遺跡は増加する。主な遺跡として、後期～晩期の長期間にわたり集落が営まれたと考えられている上野遺跡をはじめ、石鏃が 150 点近く採集されている東遺跡、後期後葉の深鉢が出土している上界土遺跡等が挙げられる。

山間部である本遺跡周辺において弥生時代～古代の遺跡は極めて少ない。中世では天神森遺跡、西藤平遺跡、金原遺跡等阿多古川水系の遺跡を中心に遺物が確認されている。なお、本遺跡の北側には、秋葉街道の道筋が残されている。

Tab.1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	時代	13 石神城跡	中世	26 上町 I	縄文
1	ヒラシロ	縄文	14 上野	縄文・奈良・平安	27 別所古墳	古墳
2	田代	縄文	15 上界土	縄文・平安・中世	28 山下	奈良・平安
3	上ノ平	縄文・中世	16 中尾生城跡	中世	29 上町 II	中世
4	森脇	縄文・中世	17 内裏	中世	30 橋平	縄文
5	西藤平	中世	18 横山城跡	中世	31 八ツ面古墳	古墳
6	天神森	縄文・平安・中世	19 クリ下	縄文	32 高岡城跡	中世
7	東	縄文	20 月夜平	縄文	33 大園 A 古墳群	古墳
8	白野	縄文・中世	21 西雲名	縄文	34 大園 B 古墳群	古墳
9	鐘詩場平	縄文	22 寺山古墳群	古墳	35 警防神社裏山古墳	古墳
10	堂山	縄文	23 日明 B 古墳群	古墳	36 下殿塚古墳	古墳
11	市場	縄文	24 日明 A 古墳群	古墳	37 上園塚	古墳
12	金原	縄文・中世	25 日明	縄文・古墳・中世	38 北島・北島古墳群	古墳・中世



Fig.2 ヒラシロ遺跡の位置

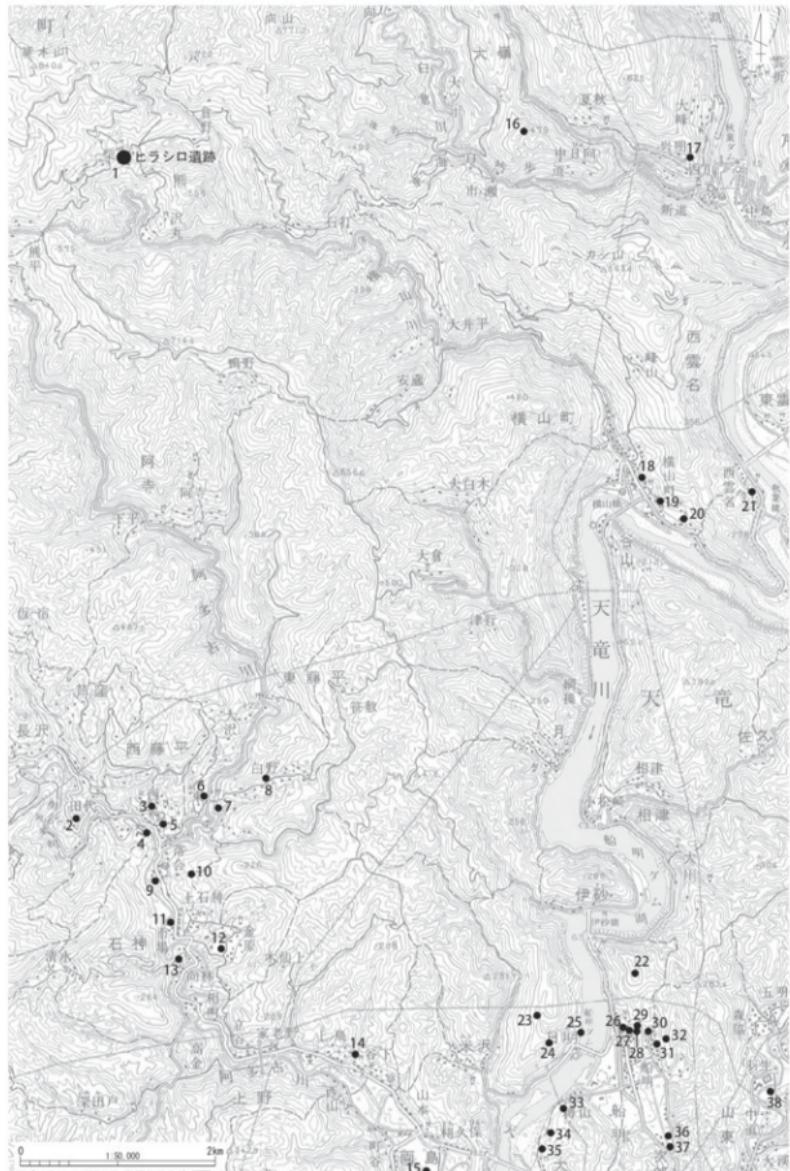


Fig.3 周辺の遺跡分布

第2章 発掘調査の成果

1 遺構（住居跡）

概要 調査地は、東西を谷に挟まれた舌状の丘陵の緩斜面である。調査以前は棚田が営まれており、地形は改変されていたが、最上段の水田部分を調査したところ、石囲い炉1基、貯蔵穴とみられる土坑1基、柱穴とみられる小穴が12基検出され、住居跡の存在が確認された。

この住居跡は竪穴住居跡と考えられるが、当時の生活面は後世の耕作等で削平されているとみられ、床面を掘り廻めた痕跡は確認できなかつた。遺構の配置状況から、住居跡の規模・形状は直径

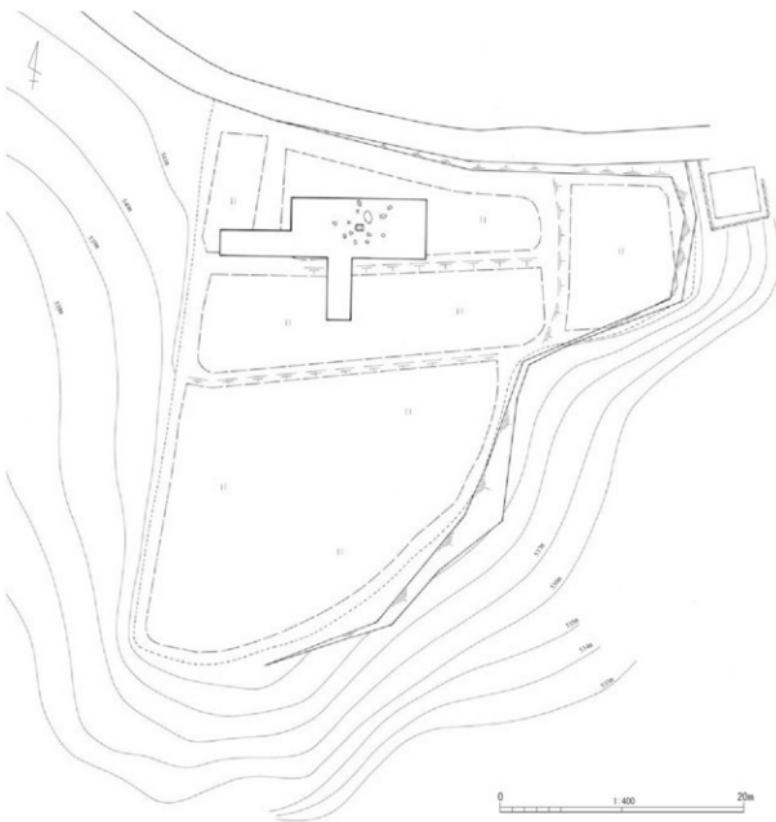


Fig.4 調査区とその周辺の地形



Fig. 5 住居跡平面図

5～6 m程度の円形プランと推定される。

石囲い炉 炉は、火を焚いて調理・採暖・採光等を行うもので、住居のほぼ中央につくられる。炉の周囲を石で囲んだ炉を特に石囲い炉と呼ぶ。本遺跡の石囲い炉は、浅く掘り立めた穴の側面にほぼ同じ大きさの平らな石を4個立てた状態で配し、平面を正方形形状に組み合わせている。ほぼ方位と同じ向きであり、規模は外側で南北62 cm、東西66 cm、内法で南北35 cm、東西40 cmを測る。

炉の内側には焼土がみられ、繩文土器片(1)が1点出土している。埋土の状況は、残念ながら土層断面の調査記録が残っていないため、詳細は不明である。出土した土器の年代から、石囲い炉が使用されていたのは、中期末頃とみられる。

土坑(SK01) 石囲い炉から40 cm北東側で検出された。南北に長い梢円形状のプランを呈し、長軸102 cm、短軸66 cmを測る。深さや埋土の状況は記録が無く不明である。規模や石囲い炉との位置関係から、食糧等を保存するための貯蔵穴として使われていた可能性がある。遺物は出土していないが石が数点出土している。

小穴(SP01～12) 石囲い炉や土坑を取り囲むように12基検出された。平面形は円形や梢円形を呈する。規模は径20～45 cm程度である。各小穴の深さの情報は残されていない。

これらの小穴はいずれも柱穴とみられるが、特にSP01・06・07・10の4基は二重穴を呈しており、その可能性が高い。SP01～07は、その配置状況や石囲い炉との位置関係から、石囲い炉が使われていた住居の柱穴と推測されており、後の復元住居の建設においても柱穴として整備している。他のSP08～12についても、住居の建て替えや改築に伴う柱穴となる可能性がある。

2 遺物

概 要 ヒラシロ遺跡では、発掘調査のほか工事中に発見されたものを含めて縄文土器片が約230点、石器が石皿、磨石、打製石斧、石鏃などの製品のほか、黒曜石の剥片等も一定数出土している。本書では、縄文土器を44点、石器を5点実測して掲載した。遺構に伴う遺物はごくわずかであり、ほとんどが遺構外からの出土である。

縄文土器 (Fig7-1 ~ Fig9-44) 遺構内からの出土は1のみで、2~43は遺構外の出土である。

1は石囲い炉の床面直上から出土した深鉢形土器の口縁部である。口縁部は平縁でほぼ直立している。口縁部には横位の隆帯がめぐり、刺突文が施されている。加曾利E IV式とみられ、中期末頃に位置づけられる。

2は磨滅した小片である。山形の押型文が施されているように見受けられ、早期の高山寺式の可能性があるが、他に早期の土器はみられないため確証を得ない。

3~12は中期後半に位置づけられる。3は内湾する口縁部の破片である。口唇部直下に隆起線による波形文、その下に連続弧線文が施されている。4は口縁部の小片で口唇部直下に3と同様の波形文が施され、その下には縦位に細かな条線文が施される。いずれも中富III式とみられる。5は端部を欠くが、口縁部が大きく外へ張り出るわゆるキャリバー形を呈する深鉢形土器である。弧状の沈線文が施されている。咲烟式とみられる。6は縦位に隆帯と結節縄文が施されている。長野県南部の伊那谷地方に多くみられる特徴であり、当地域では天竜川流域に多く出土し広野C式と呼ばれたこともあるが、胎土の特徴から伊那谷地方からもたらされた個体の可能性が考えられる。7は縦位に2本の隆帯と縄文が施される。8は口縁部が内傾し、隆帯で区画された文様帶に縦位の沈線文が施される。9は縄文が施された小片である。10は縦位の沈線による区画帶に縄文が施される。11は縦位の隆帯がみられる。7~11は、いずれも加曾利E式とみられる。12は底部の破片で、縦位の沈線がみられる。中期後半の曾利IV・V式の影響を受けているとみられる。

13~26は後期初頭に位置づけられる。13~16は太い沈線で区画された内側に縄文が施された磨消縄文の一群である。13・14は波状口縁で、口縁の形状に沿うように文様帶がめぐる。15は平縁の口縁端部まで縄文が施される。16も横位の区画帶に縄文が施される。いずれも中津式とみられる。17は13~16のような太い沈線による区画帶状のものが設けられているが、磨消ではなく沈線の内外に縄文が施されている。中津式とみられる。18・19は屈折して開く口縁部の内側に2条の沈線がめぐり、縄文が施されている。称名寺式とみられる。20・21は、波状口縁の頂部に刺突による孔が穿たれている個体である。いずれも孔は貫通していない。中津式あるいは称名寺式とみられる。22~24は、縄文が施されず横位に2条の沈線がめぐる一群である。いずれも称名寺式とみられる。25は、波状口縁の頂部である。肥厚した口縁端部面に沈線による渦巻文が施されている。中津式・称名寺式に併行するとみられるが、堀之内式に下る可能性もある。26は粗製土器の口縁部破片で、縦位に条線文が施されている。中津式・称名寺式に併行するとみられる。

27~33は、後期前葉に位置づけられる。27・28は口縁外部に狭い文様帶を設けている。27には渦巻文が確認される。いずれも堀之内I式とみられる。29は波状口縁頂部の破片、30は口唇部を薄く仕上げた浅鉢の破片とみられる。いずれも堀之内I式とみられる。31・32は胴部破片である。31は渦巻文が施されている。32には突起がみられる。端部を欠損しているが、アーチ状を呈する把手になると考えられる。33は胎土が著しく粗いが、口縁部付近の破片とみられる。上部へ向かい肥厚しており、縦方向の隆帯が2条施され、孔が穿たれている。34は、無文の粗製土器の口縁

部である。31～34は堀之内I～II式とみられる。

35～37は、後期中葉の加曾利B I式に位置づけられる。35は口縁部の破片で外面に3条の沈線がめぐらされる。36も口縁部の破片である。外面の口縁端部直下にキザミを施した細い突帯がめぐり、内面には円形刺突文と突帯がめぐる。器面は丁寧にミガキが行われており、色調は黒色を呈するなど典型的な加曾利B式の特徴を有し、胎土に在地特有の白い礫（石英や長石）の混入がみられないことから、関東方面からの搬入品と考えられる。37は無文の粗製土器の口縁部である。口縁端部内面を窪ませている。

38は条痕文が施された口縁部の破片である。晩期後葉頃のものとみられる。胎土が在地のものと異なり密であることから天竜川下流域からの搬入品の可能性がある。他に晩期の土器はみられず、後期後葉の土器も確認されていないことから、集落が晩期まで継続していたかどうかは不明である。

39・40は時期が判然としない個体である。39は口縁部の破片である。薄手の造りであり、口縁端部は折り返されており、口縁端部直下の外面には狭い幅で縦文が施されている。40は頸部の破片とみられる。

41～44は、いずれも深鉢の底部である。41は底径10.4cmを測る。胴部に向かって直立気味であり、中期のものと考えられる。42は底径5.2cm、43は底径7.6cm、44は底径6.0cmである。42～44は底部から胴部に向かって広がる器形であり、後期のものと考えられる。

石 器 (Fig.9-45～49) 45は緑色片岩製の石皿である。平らな面の両面に磨り痕、敲打痕を有するが、特に片面に顕著である。

46は砂岩製で磨り痕と敲打痕の両方が認められるため、磨石・敲石兼用で用いられたとみられる。やや扁平な椭円形状を呈し、磨り痕は平らな面の両面に認められ、敲打痕は側面を中心に認められる。

47はやや小型の打製石斧である。

48・49は石鐵である。いずれも無茎の回基である。48はチャート製、49は黒曜石製である。

他に、黒曜石の剥片等が多数出土している (Fig.6)。



Fig.6 出土した黒曜石と石器

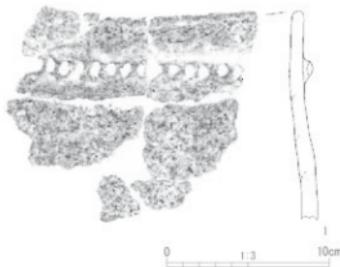


Fig.7 石圓い炉出土遺物実測図



Fig.8 出土遺物実測図（遺構外その1）

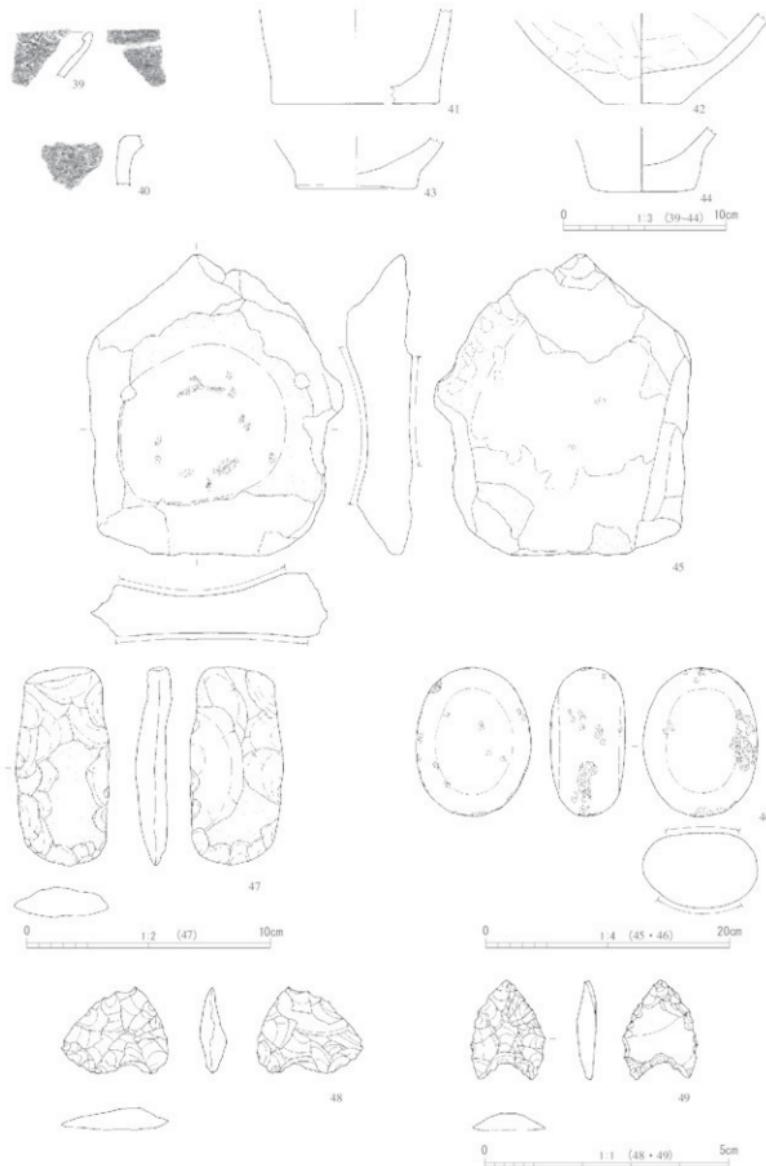


Fig.9 出土遺物実測図（遺構外その2）

3 小結

住居跡について 今回の発掘調査では、石囲い炉を有する住居跡が1軒確認された。床面を掘り下げた状況は確認できないが、地表面から遺構検出面までの浅さを考慮すると、縄文時代の生活面はすでに失われていると推測されるため、堅穴住居の可能性が考えられる。

住居跡からの出土遺物は中期末の加曽利E IV式の土器1点のみであるが、石囲い炉の底部付近から出土しているため、住居跡の時期を示すものと捉えられる。

北遠地域では発掘調査数自体が少ないこともあり、縄文時代の住居跡の検出例は本例のみに留まる。地理的に本遺跡と距離はあるが、三方原台地やその周辺には石囲い炉をもつ住居跡が検出された縄文時代の遺跡がいくつか知られている。三方原台地東縁の高位河岸段丘（富岡面）上に立地する染地石遺跡では、中期後半の石囲い炉を有する堅穴住居跡が単独で確認されており、本遺跡とやや似た状況を示している。染地石遺跡の住居跡は径約5mの円形であり、本遺跡の住居跡も柱穴とみられる小穴の配置状況から円形を志向していたと推測される。

出土土器について いずれも破片の状態であり、全形をうかがうことのできる個体は存在しないが、中期後半～後期中葉を主体とする時期の土器が確認された。

中期後半～末の土器型式は、加曽利E III～IV式が主体となるほか、東海系の咲烟式、中富III式、中部高地系の曾利IV～V式などの影響を受けた個体がみられる。の中でも、Fig.8-6は縦位の結節縄文が施され、胎土が粗く白い礫の粒子が大きい。胎土に白い礫の小片（石英、長石）が混じるのは天竜川流域の特徴で、上流にいくほど胎土が粗く礫の粒子も大きくなる傾向がある。縦位の結節縄文を施す一群が存在している南信地域からの搬入品とみられる。

後期初頭の土器型式には、関東地方周辺に分布する称名寺式と、西日本の広い範囲に分布する中津式がある。称名寺式は、中津式の影響を受けて成立したと考えられており、いずれの型式も太い沈線で曲線的に区画された磨消縄文が施されるという特徴を共有している。当地域は地理的に両型式の中間地域に位置しており両者の特徴が混在する。今回はなるべく、各個体の特徴をもってどちらの型式に属するか記してみたが、いずれの土器も小破片であることから明確な岐別は難しい。

後期前葉～中葉の土器型式は、後期前葉が堀之内I～II式、後期中葉が加曽利B I式に属する。Fig.8-36は胎土の特徴等から関東方面からの搬入品とみられる。

それ以外の時期の土器はほとんどみられないが、条痕文土器が1点出土している（Fig.8-38）。胎土が密であり、天竜川下流域からの搬入品とみられる。

調査成果からみた遺跡の様相 今回の発掘調査において、確認された住居跡は1軒のみであるが、出土土器の示す時期は中期後半～後期中葉と比較的幅広いことから、小規模ながら一定期間継続した集落が形成されていたと推測される。

また、本遺跡は山間地域において周辺の遺跡とは隔絶されたような立地状況ではあるが、南信地域や関東地方などからの搬入品が出土し、中部高地からもたらされたとみられる黒曜石も確認されるなど、天竜川を介した他地域との交流がうかがえる。また、中期後半～後期初頭には東海・西日本系の土器型式もみられることから、地理的に近い奥三河地域との交流の可能性も考えられる。

Tab.2 出土土器観察表

Fig.	No.	造構	部位	時期	色調	胎土	備考
7	1	石閉炉	口縁部	中期末	にぶい黄褐	やや粗	加曾利E IV式
8	2	造構外	—	早期?	にぶい黄褐	やや粗、小継含	高山寺式?
8	3	造構外	口縁部	中期後半	褐	やや粗	中富III式
8	4	造構外	口縁部	中期後半	にぶい黄褐	やや粗	中富III式
8	5	造構外	口縁部	中期後半	明褐	やや粗、小継含	吹焼式
8	6	造構外	胴部	中期後半	にぶい黄褐	やや粗、小継含	結節圖文、南信地域からの搬入品か
8	7	造構外	胴部	中期後半～末	明褐	やや粗	加曾利E III～IV式
8	8	造構外	口縁部	中期後半～末	にぶい黄褐	やや粗	加曾利E III～IV式
8	9	造構外	胴部	中期後半～末	褐	粗、小継含	加曾利E III～IV式
8	10	造構外	胴部	中期後半～末	暗褐	やや粗、小継含	加曾利E III～IV式
8	11	造構外	胴部	中期後半～末	にぶい黄褐	やや粗	加曾利E III～IV式
8	12	造構外	底部	中期後半	明褐	やや粗	曾利IV～V式の影響か
8	13	造構外	口縁部	後期初頭	褐	やや粗、小継含	中津式
8	14	造構外	口縁部	後期初頭	暗褐	やや粗、小継含	中津式
8	15	造構外	口縁部	後期初頭	にぶい黄褐	やや粗	中津式
8	16	造構外	胴部	後期初頭	にぶい赤褐	やや粗、小継含	中津式
8	17	造構外	胴部	後期初頭	にぶい黄褐	やや粗	中津式
8	18	造構外	口縁部	後期初頭	暗褐	やや粗	称名寺式
8	19	造構外	口縁部	後期初頭	褐	やや粗	称名寺式
8	20	造構外	口縁部	後期初頭	灰黄褐	やや粗	中津式・称名寺式
8	21	造構外	口縁部	後期初頭	黒褐	やや粗	中津式・称名寺式
8	22	造構外	口縁部	後期初頭	にぶい黄褐	やや粗	称名寺式
8	23	造構外	口縁部	後期初頭	褐	やや粗	称名寺式
8	24	造構外	胴部	後期初頭	にぶい黄褐	やや粗	称名寺式
8	25	造構外	口縁部	後期初～前葉	にぶい黄褐	やや粗	中津式・称名寺式～堀之内式か
8	26	造構外	口縁部	後期初頭	にぶい黄褐	密	中津式・称名寺式併行粗製土器
8	27	造構外	口縁部	後期前葉	褐	やや粗	堀之内I式
8	28	造構外	口縁部	後期前葉	褐	やや粗	堀之内I式
8	29	造構外	口縁部	後期前葉	にぶい黄褐	やや粗	堀之内I式
8	30	造構外	口縁部	後期前葉	黒褐	やや粗	堀之内I式
8	31	造構外	胴部	後期前葉	にぶい黄褐	やや粗、小継含	堀之内I～II式
8	32	造構外	胴部	後期前葉	にぶい黄褐	やや粗	堀之内I～II式
8	33	造構外	胴部	後期前葉	褐	粗、小継含	堀之内I～II式
8	34	造構外	口縁部	後期前葉	灰黄褐	やや粗	堀之内I～II式
8	35	造構外	口縁部	後期中葉	褐	やや粗	加曾利B I式
8	36	造構外	口縁部	後期中葉	黒	密	加曾利B I式、関東からの搬入品か
8	37	造構外	口縁部	後期中葉	にぶい黄褐	やや粗	加曾利B I式
8	38	造構外	口縁部	晚期後葉か	明褐	やや粗	条痕文、天竜川下流域の搬入品か
9	39	造構外	口縁部	不明	褐	やや粗	
9	40	造構外	頭部	不明	にぶい黄褐	やや粗	
9	41	造構外	底部	中期か	明赤褐	やや粗	底径 10.4 cm
9	42	造構外	底部	後期か	褐	やや粗	底径 5.2 cm
9	43	造構外	底部	後期か	褐	やや粗	底径 7.6 cm
9	44	造構外	底部	後期か	褐	やや粗	底径 6.0 cm

Tab.3 出土石器観察表

Fig.	No.	造構	種別	法量	備考
9	45	造構外	石皿	長 24.0 cm、幅 21.0 cm、厚 5.4 cm、重 3,770g	緑色片岩
9	46	造構外	磨石・敲石	長 12.3 cm、幅 9.5 cm、厚 6.2 cm、重 1,020g	砂岩
9	47	造構外	打製石斧	長 8.2 cm、幅 3.8 cm、厚 1.3 cm、重 51 g	
9	48	造構外	石鏃	長 2.0 cm、幅 1.5 cm、厚 0.4 cm、重 0.9 g	チャート
9	49	造構外	石鏃	長 1.8 cm、幅 2.2 cm、厚 0.5 cm、重 1.7 g	黒曜石

第3章 保存整備事業の概要

1 事業の概要と整備計画

概要 保存整備事業は平成4～5年度に実施した。平成4年度は、事業用地の買収、整備計画策定、造構保存整備工事を実施した。平成5年度は、復元住居、休憩所、駐車場等の整備工事を実施した。事業は、地域文化財保全事業（地域総合整備事業債を充当）、中山間地域農林業整備事業（静岡県補助事業）として実施した。

整備計画 調査で検出された住居跡は埋戻し、上部に遺構表示サインを設置することとした。また、調査地東側に竪穴住居を復元することとした。調査地点周辺は、遊歩道、広場、芝など平面的な整備を行い、南側には休憩所や駐車場等を整備し、西側に車両の進入路を整備することとした。

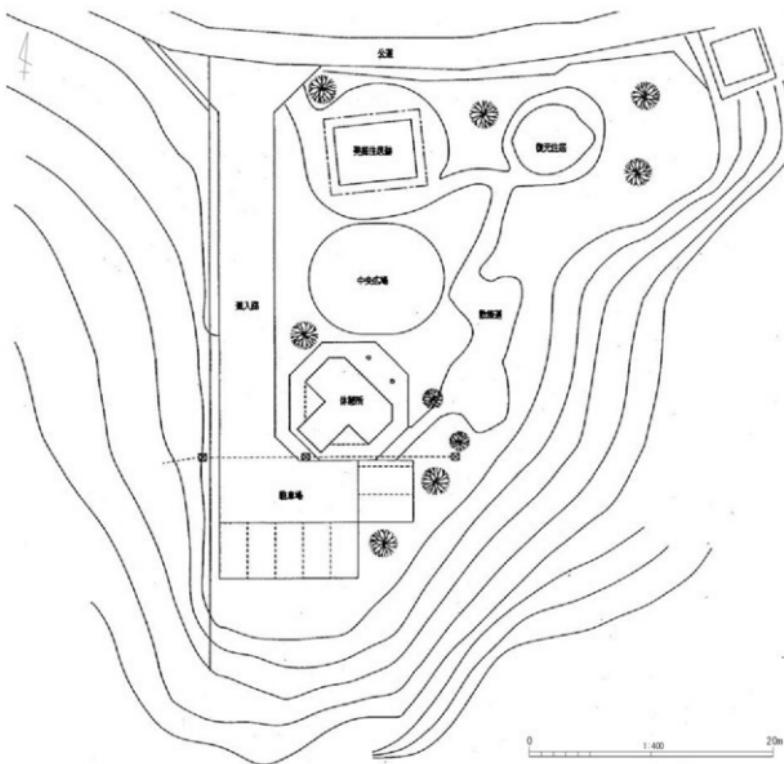


Fig.10 整備計画図

2 整備工事

遺構保存整備工事 この工事で実施したのは、遺構の被覆保護工、サイン工、遺構上への立入を制限するための柵工である。発掘調査で検出された住居跡とその周辺の 48 m^2 ($8\text{ m} \times 6\text{ m}$) を対象とした。遺構の被覆保護工については、遺構内および遺構面上に 5 cm 厚で砂を被覆し、さらにその上部に 40 cm 厚で土を被覆した上で表面に張芝を行った。遺構表示サインは、被覆保護された上部において、石いり炉や柱穴等の位置の真上となるように設置したほか、説明板を 1 基整備している。

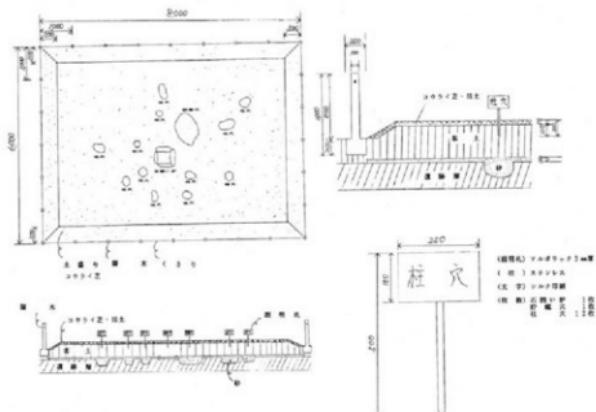


Fig.11 遺構保存整備工事 平面図・断面図・詳細図

復元住居整備工事 発掘調査で検出された石いり炉と柱穴と想定される小穴の位置や規模に基づき、竪穴住居の整備工事を実施した。整備箇所は検出遺構の直上ではなく、約 15 m 東側の遺構が存在しない箇所を選定した。発掘調査では竪穴住居の掘方は検出されておらず、住居の平面形は不明であるが、柱穴の配置状況と他事例を参考に、長軸 7.6 m 短軸 5.7 m 程度の楕円形を呈し、周囲に土堤を有する竪穴住居と想定して建物の復元を行った。

柱組は 6 本の主柱を 6 本の梁で組んだ不整な 6 角形の構造としている。屋根は長径方向に棟木をのせて煙出しを設けたものとした。

柱材は周辺に自生しているカシ、シイ、コナラ、クヌギなどを使用し、柱の固定材は強度を保つため釘や番線を使用し、化粧材として蔓や襤を用いた。主柱の基礎はコンクリート基礎とした。屋根材は茅で厚み $450\sim 600\text{mm}$ の 2 度葺きとした。

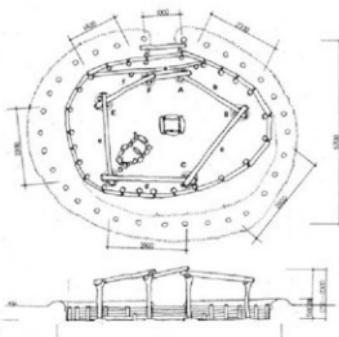


Fig.12 復元住居平面図・断面図

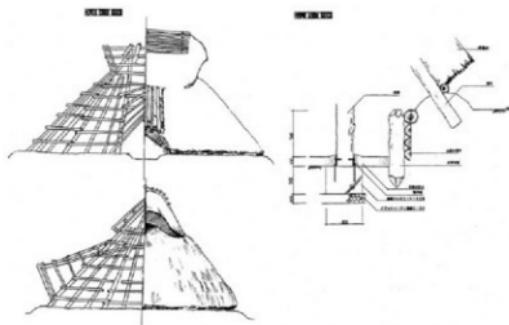


Fig.13 復元住居立面図・構造図



Fig.14 休憩所（ガイダンス施設）立面図



Fig.15 休憩所（ガイダンス施設）平面図

復元住居内部の石窓い炉は、実物に近似する自然石を選定して造形された。また、貯蔵穴とみられる土坑についても内部から石が数点出土しているため、石で囲まれていたと想定して表現している。床面には、10 cm厚の三和土が施されている。住居掘方の壁面には、丸太の柱と横木による土留めが行われている。

休憩所整備工事 休憩所は木造平屋建てで、建築面積は47.41 m²である。便所と展示室から構成されており、遺跡のガイダンス施設としての役割を担っている。展示室には、遺跡の概要や縄文時代の概説、天竜市（現天竜区天竜地域）の年表等の解説パネルを設置しており、ヒラシロ遺跡など天竜地域の縄文時代の遺跡から出土した遺物をはじめ、縄文土器レプリカ、堅穴住居のジオラマなどを展示している。

その他施設整備工事 園内の各施設をつなぐ散策道は砂利敷で、整備面積は168 m²である。

楕円形状の中央広場は、整備面積95 m²で、10 cm厚の真砂土を材とした舗装が施されている。

植栽は、公園内に張芝419 m²、高木9本などが施されているほか、敷地境等に生垣としてドウダンツツジなどの低木が植えられている。

進入路・駐車場は、あわせて295 m²のアスファルト舗装が施されている。進入路は幅員4.5 m、駐車場の収容台数は普通車7台分である。



①遺構保存整備工事 砂被覆工



②遺構保存整備工事 サイン・張芝工



③遺構保存整備工事 完了状況



④復元住居整備工事 床面掘削



⑤復元住居整備工事 柱組立状況



⑥復元住居整備工事 茅葺工



⑦復元住居整備工事 完了状況(内側)



⑧復元住居整備工事 完了状況(外観)



⑨林憩所整備工事 完了状況(外観)



⑩休憩所整備工事 完了状況(内観)



⑪誘導サイン整備工事 完了状況



⑫整備事業完成状況 遠景(南東から)



⑬整備事業完成状況 近景(北西から)



⑭整備事業完成状況 近景(南から)



⑮一般公開記念イベントの様子

Fig.16 整備状況写真

第4章 総括

ヒラシロ遺跡の発掘調査では、石窯1基、貯藏穴とみられる土坑1基、柱穴とみられる小穴が12基検出され、縄文時代中期末頃の住居跡の存在が確認された。また、出土遺物として縄文土器片が約230点、石器が石皿、磨石、打製石斧、石鏃などの製品のほか、黒曜石の剥片等も出土している。また、発掘調査後に実施された保存整備事業によって、遺構は保存のため埋戻されており、現地は復元住居やガイダンス施設を有する史跡公園として公開・活用されている。以下に特筆すべき点や今後の課題について記すことで総括としたい。

調査成果の総括と今後の課題 ヒラシロ遺跡の発掘調査では、北遠地域で唯一の確認例である住居跡が検出された。また、山間部に単独に立地する遺跡であるものの、黒曜石の一定数の出土、南信地域、関東地方からの搬入品とみられる土器の出土などから、天竜川やその支流のルートを介在とした他地域との交流をうかがうことができた。

北遠地域では本遺跡以外の発掘調査事例には乏しいものの、縄文時代の遺跡からの採集遺物は比較的多く存在している。今後は、北遠地域における新出資料の増加を期待しつつも、それら既存の採集資料を改めて精査し、中・西遠地域、南信地域、奥三河地域の土器との比較検討を加えていくことが、地域間の交流の様相を探っていく上で必要ではないかと考えられる。

保存整備事業と今後の管理・活用 ヒラシロ遺跡では、開発工事中の不時発見にもかかわらず、史跡指定の手続きと保存整備事業が速やかに行われ、史跡公園として今日に至るまで管理・活用されている点について、当時の関係者各位の尽力と地元の方々の協力には多大なる敬意が払われるべきである。

しかしながら保存整備事業から20年以上が経過したこと、復元住居をはじめとする史跡公園内の施設の老朽化や陳腐化、これまで管理を担ってきた地元住民の高齢化、過疎化等の課題が生じつつある。地域の貴重な歴史遺産として本遺跡を後世に伝えていくためには、さまざまな視点から有効な管理・活用策の検討が求められる。

【参考文献】

- 神村透 1978 『結節縄文をつけた一群の土器』『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 天竜市役所 1981 『天竜市史』上巻
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編三 考古3
- 戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』
- 浜北市教育委員会 2000 『内野古墳群』
- 横浜市歴史博物館 2016 『称名寺貝塚と称名寺式土器』



1 遺跡遠景（南東から）



2 調査区全景（北から）



1 住居跡検出状況（東から）



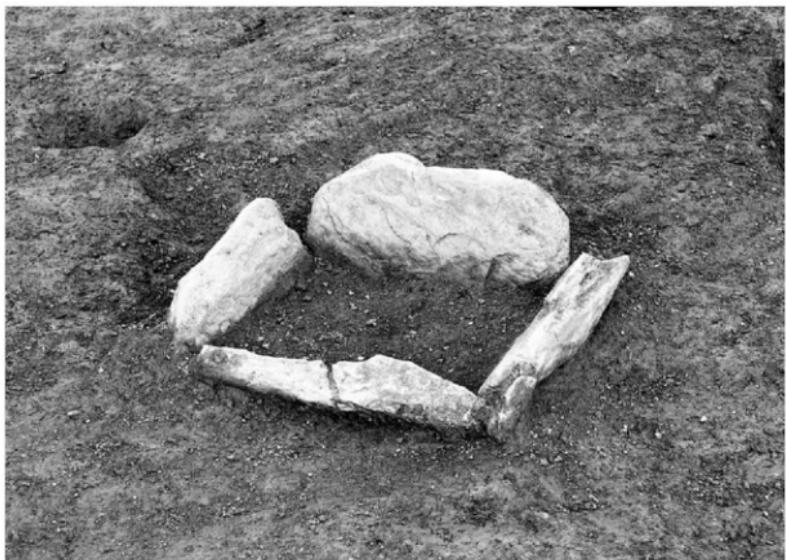
2 住居跡検出状況（南から）



1 住居跡検出状況（西から）



2 土坑・石囲い炉検出状況（北東から）



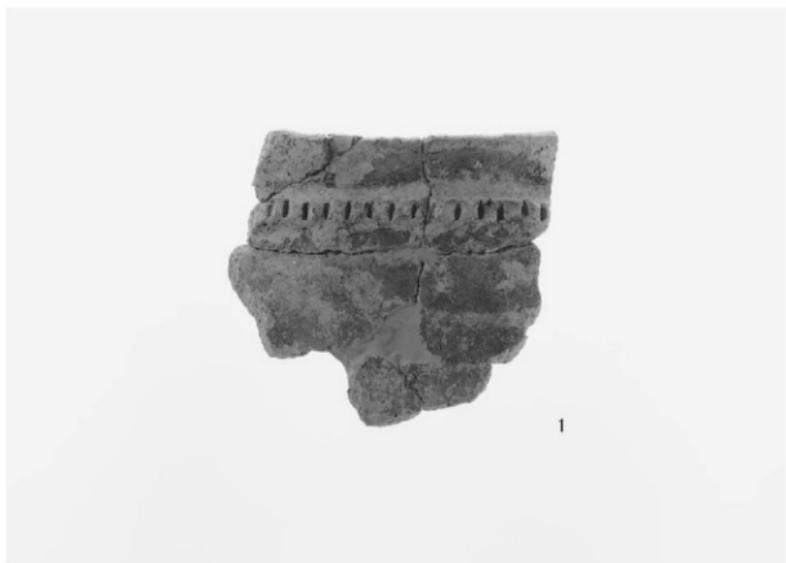
1 石囲い炉検出状況（南東から）



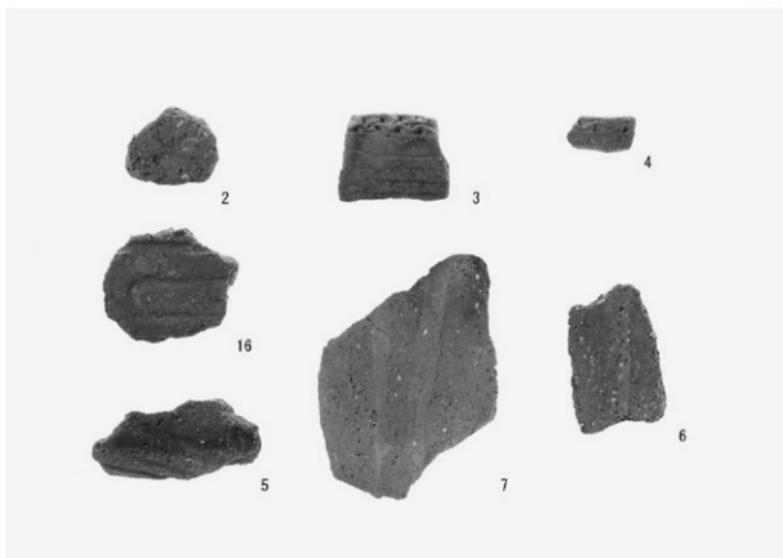
2 土坑検出状況（北から）



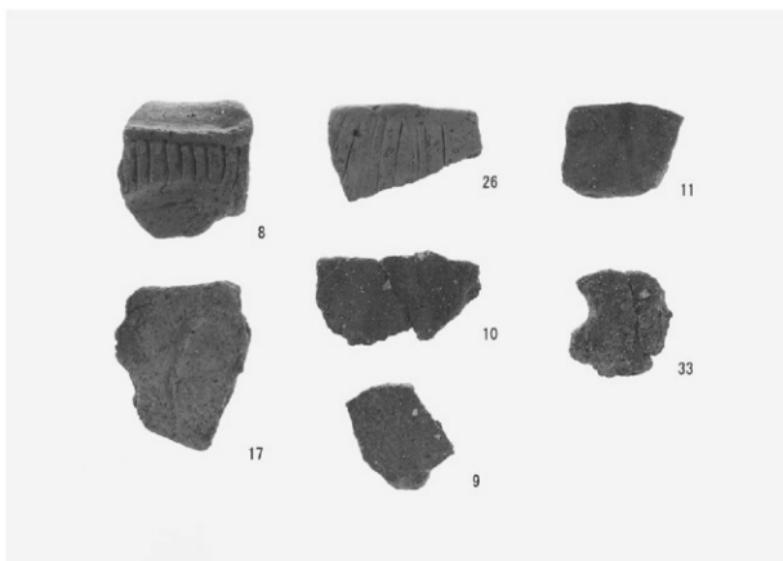
1 石囲い炉遺物出土状況



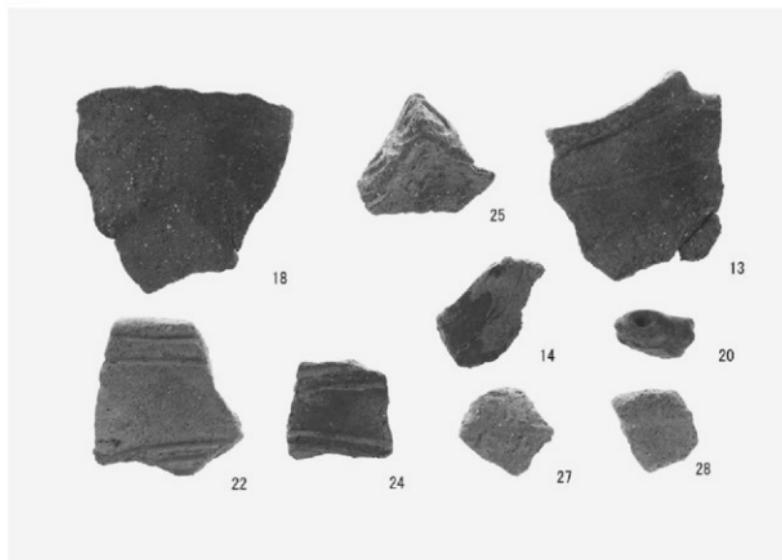
2 石囲い炉出土土器



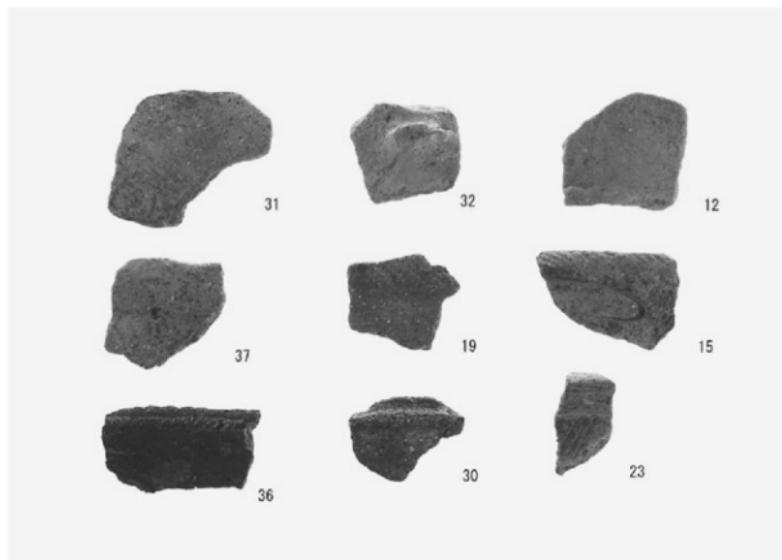
1 遺構外出土遺物 (1)



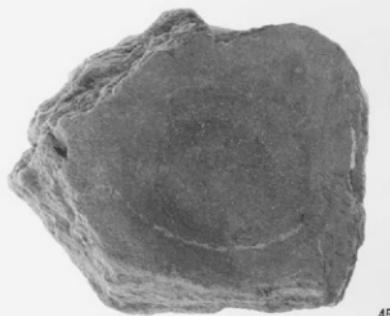
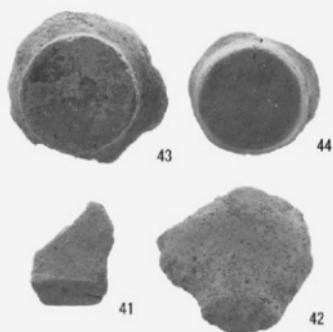
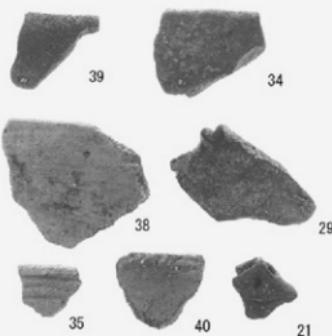
2 遺構外出土遺物 (2)



1 遺構外出土遺物 (3)



2 遺構外出土遺物 (4)



報告書抄録

書名(ふりがな)		ヒラシロ遺跡 (ひらしろいせき) ~発掘調査と保存整備事業のあらまし~						
編著者名		鈴木京太郎						
編集発行機関		浜松市教育委員会(浜松市市民部文化財課及び天竜区役所まちづくり推進課が補助執行) 浜松市市民部文化財課 〒430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466 FAX(053)457-2563 浜松市天竜区役所まちづくり推進課 〒431-3302 浜松市天竜区二俣町二俣 481 TEL(053)922-0086 FAX(053)922-0093						
発行年月日		2016年3月18日						
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヒラシロ遺跡	静岡県 浜松市 天竜区 熊 665-2	221376	7-1-75	34 度 97 分 35 秒	137 度 75 分 95 秒	1992年 1月 24 日～ 2月 6 日	77 m ²	國場整備工事 に伴う埋蔵文化 財充掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
ヒラシロ遺跡	集落	縄文時代		住居跡		縄文土器 石器	縄文時代中期後半～後期 中期を主体とした遺構、遺 物を確認	
要約	ヒラシロ遺跡は静岡県浜松市天竜区熊に所在する縄文時代中期後半～後期中期を主体とする遺跡である。遺跡は傾斜が緩やかな南面した山腹に立地している。遺跡として周知されていなかったが、国場整備工事中に遺構・遺物が確認されたため、埋蔵文化財包蔵地として登録された。検出された遺構は、石窓い戸 1 基、土坑 1 基、小穴 12 基で、石窓い戸周辺に遺構が集中していることから、堅穴住居跡が 1 計存在したと考えられる。出土遺物は縄文土器と石器で、縄文土器は中期後半の加曾利 E III～IV 式、後期初頭の中津式・称名寺式、後期前葉の堀之内 I ～ II 式、後期中期の加曾利 B I 式を主体とする。南側地域や関東地方などからの搬入品がみられる点が注目される。							
	発掘調査後には保存整備事業が行われた。遺構は埋め戻されて復元住居やガイダンス施設が整備されており、現在は史跡公園として公開されている。							

ヒラシロ遺跡

～発掘調査と保存整備事業のあらまし～

2016年3月18日発行

発 行 浜松市教育委員会

印 刷 松本印刷株式会社

ヒ
タ
シ
ロ
運
賃
り受取立と保有整備事業のあらまし

Hirashiro Site

An Outline Report of Excavation and Preservation
on Site of The Jomon Period
in Western Shizuoka Prefecture, Japan



March, 2016

Hamamatsu Municipal Board of Education

浜松市教育委員会